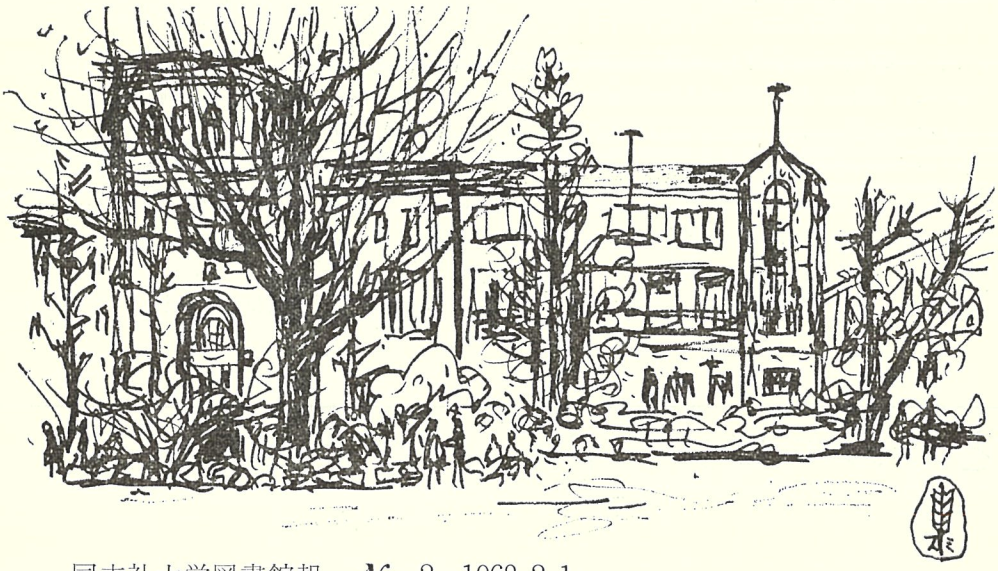
びぶりおてか



同志社大学図書館報　*No.* 2. 1968.2.1

新図書館の建設

小橋一郎
図書館長

あたらしい大学図書館の建設計画が進められています。学長の熱意と，学内各方面の支持のもとに，大学においては，今出川校地内烏丸今出川角地附近に，延3,000坪，学生用座席数1,000以上，書庫収蔵量500,000冊の近代的な図書館を，昭和43年度中に建設しようという計画が推進せられており，さらに法人理事会においても，新図書館建設という基本方針が承認せられました。

大学の中央部に，広く利用せられる蔵書をみずから有し，また各研究室図書の相互利用，さらには諸大学図書の相互利用のかけはしとなって，研究者に最新広汎の学術情報を提供する場所として，また学生に自学自習のための快適な環境を供し，図書の整備とレファレンス・サービスによって勉学への便宜を供する場所として，あたらしい図書館がその威容を現わす日が待たれます。

図書館の近代的な機能，とくにまた学生の利用の便宜を考えると，大学図書館の位置は，大学校地の中央部，メインストリートに面していることが望まれます。現在の図書館は，もと同志社図書館として発足し，後に大学図書館となったものでありますが，大学図書館としては校地東端に，しかも道路を距てて位することになってしまいました。新図書館の位置は，以上のような観点と，速やかな実現可能性の考慮とから，烏丸今出川角地附近と計画されました。ただこの位置は，交叉点に近く，騒音が欠点ですが，これは現在の建築技術によって充分に解決することができます。

学生用座席数は，現在の学生数からみて，少なくとも1,000席以上が必要と考えられます。現在の図書館では477席，新町読書室の94席を加えても571席にすぎません。新図書館は，開架閲覧室（開架図書50,000冊），閉架閲覧室，レファレンス・ルーム，雑誌室，読書室を含めて1,000席以上を設け，冷暖房施設を備え，採光にも工夫を凝らさなければならないと思います。

あたらしい図書館の庶務・整理・閲覧に関するいわゆる管理部門の諸室は，図書館の業務活動を円滑にして，研究・勉学に対する奉仕を迅速かつ効率高く実施しうるよう，機能的に配置せられなければなりません。現在の図書館は，漸次拡張せられてきたために，教室を閲覧室にしたり，廊下を室に改造したり，書庫の中で文献複写業務を行なったり，無理な点が多く，管理部門の配置も機能的でなく，年間数万冊の図書を処理するには狭隘となっています。また現在の書庫は，20数万冊の容量があり，かつては最新の設備を誇るものでありましたが，現在すでに図書館のみの蔵書数が20万冊を超え，年々の増加を考えますと，少なくとも50万冊を収容できる書庫が必要となっております。

情報の激増にともない，情報管理の必要が痛感せられておりますが，学問研究の領域もその例に洩れません。学術情報管理の任務を担うべき図書館は，情報管理に関するあたらしい現象と方法に対応するため，研究を怠ってはなりません。マイクロフィルムやテープ等視聴覚資料の管理・利用は，当面の問題でしょう。文献探索に電子計算機を利用する研究も進められております。図書カードもやがてはテープにとって代わるかも知れません。あたらしい図書館の建設にあたっては，せめてこれらのあたらしい事態に応じうるだけの空間的余裕がほしいものです。

由緒ある現在の図書館に対する郷愁も強いでしょうが，同志社大学の近時の急速な発展と，大学図書館に要求せられる近代的機能にかんがみ，同志社大学にふさわしい図書館の建設に向けて，学園関係者各位のいっそうのご支援をお願いいたします。

ひとつのエピソード

原　猛雄

大正8年経済科卒業生・同志社大学名誉教授

"One purpose for Doshisha" を旗じるしとして同志社の卒業生が結束することは，新島先生の校祖としての最大の念願であったと信じる。私達大正8年の同志社大学政治科，経済科の卒業生も個人，個人としては，いろいろな立場で同志社のため何等かの貢献をしてきていると思うけれど，一昨年度は私達が学窓を巣立って，ちようど45周年に相当するのを記念して，特に在学生諸君との連繋を深め，意義あらしめる目的で同窓と相談のうえ大学図書館に若干の図書講入費を差上げることにして，さきにこれを寄附させていただいた。まことに貧乏者ぞろいの一燈で，募金し得た金額は224,404円にすぎなかったが，図書館では大変に喜んでいただいて，大正時代以降現在まで年度卒業生の寄附金によって，在学生のための図書を購入させてもらった記憶は，今日までに一回も無く実に有難く感謝にたえないとの，言葉を耳にしている。

昔日の学生と違って現在の学生諸君は，愛読し思索を深めたいと念願しても沢山な図書を購買することは大変な生活上の経済負担で，このような真面目な学究の人達に，図書館図書を活用していただくために私達のささやかな計画がお役に立てば，何よりの同志社への報恩の一端であると考えている。また多数の学生諸君のなかには読書人たるの誇りを忘れて，ただイージィ・ゴーイングで刺戦的な遊興に貴重な青年時代を浪費している人達も皆無とはいえないと思うが，この種学生諸君が同志社大学の学徒として日夜文献と取組む，真面目な生活の場を図書館で見出してもらうためにも私達の小さい意図が利用されれば，私達はこの上ない喜びとするものである。

図書館でこの度購入していただいた図書の種別は，政治・行政・法律・経済・経営・簿記・会計・商業・金融・統計・労働・社会の各専門分野の文献，および語学辞書・書誌・索引にわたり90余冊に達している。そして特に私達の購入図書にはその扉に『本書は大正8年度大学経済科，政治科卒業生指定寄附によるものである』と記載されてあるが，これは在学生諸君がこれらの図書をひもとかれるとき，同志社の名のもとに，卒業生と在学生とが一体であるとの意識を深めて利用して下さることに期待をよせるからである。

私達は同志社大学の在学生諸君のために，将来もこの計画を存続することを申合せている。図書館からの決算報告書によると，昭和41年7月15日現在で，14,646円を次期に繰越して下さっているが，私達はこの繰越金の上にさらに近き将来何程かの寄附金額を殖して，図書冊数を増加していきたいと考えているし，単に社会科学関係の文献だけに限らず，将来は人文科学や自然科学方面の図書も是非整備してほしいし，特に基督教・神学関係の文献も用意計画してほしいと念願している。

同志社大学にはその学園としての建学の理想が厳存する。しかも同志社にとって最も大切な基本条件は，大学とその卒業生

との連繋である。米国のエール，ハーヴァードを始め，一流の私立大学は皆明確な建学の理想と，卒業生との緊密な結びつきを持っている。現在の同志社学園にやや欠けるものは，この学園を巣立ったことを誇りとする優秀なアドバイザーとしての卒業生の支持が一般に稀薄になっていることではなかろうか。私達のこの度の計画は図書館という貴重な学園の場をとおして，大学と私達卒業生との結びつきを具体化したものであって，在学生諸君は私達のこの企図を理解して読書の機会に同志社大学生としての視野を広め，思索を深め智識人としての見識を高くして，将来日本および国際社会の重要な一員として活躍する機会に母校との関係を一層緊密なものにするよう努力してほしいと思います。

読書のよろこび

竹中正夫
神学部教授

昨年の秋のように美しい日々がつづくと，秋の夜ながに，書物をよむよろこびをしみじみと感じさせられる。秋の一日は，ちようど長い間成長したくりの木が熟するように，貴重な毎日である。そのような，日々を読書に用うることの出来る人はさいわいである。

現代のような煩いの多い，騒々しい時代においてはますます読書のもつ意味は多くなってくるし，読書をすることも並大低の努力ではなし得ないことである。

わたしは読書において最も重要なことは集中して一つのものを読破する力であると思う。頁をパラパラっとメクルことはたのしいことであり，興のむくままにそこらを眺めることもたやすいことである。しかし，一つの部厚い書物を読みこなすことは，ちようど山に登るようなもので，ある一定の時間忍耐をもって心身を集中しておこなわなければならない。山の写真をみたり，地図をひろげて登山の計画をたてたりすることはたのしいことである。しかしいざ山に登るとなると，重い荷を負い，平たんな坂道をあえぎながら辛抱づよく登らねばならない。忍耐と根気がいる。しかし，そのような労苦があってこそ，頂上からみえるすばらしい眺めもみられるのである。

私がはじめて米国で留学をしたとき，一番感心したことは，学生たちがよく読書することであった。もっとも私が学んだ大学はイェール大学で，アメリカでもハーバードとならんだ名門であって，そこに集まる学生たちも優れた能力をもっているものが揃っていた。あるとき寮で1人の学生が自分の出身校における優等生のバッヂを誇らしく示したことがあった。ところがみんなあまり驚きもせず，それぞれの出身校でもらった優等生のバッヂを出して笑ったことがあった。それ位すぐれた学生が集まっていたかも知れないが，読書はびっくりするほどよくしていた。

私は日本では，京都大学で学び，とくに勉強家ぞろいの多かった京都大学基督教青年会の地塩寮で学生生活を送ったことがあるので，読書をすることには一応の訓練もうけていたつもりであった。そのころ地塩寮には軍隊から帰ってきた学生たちが一ぱいであり，いずれも，長い間吸いたい空気をがまんして窒息しそうになっていたところを解放されたおもいで，読書に励む学徒たちが多かった。いま京大の結核研究所の助教授をしておられる安平公夫氏や，岐阜大学の医学部の解剖の教授をしている金関毅氏や，京大で心理学を研究している中島誠助教授，それに京大の農学部の農芸化学を担当しておられる橋爪斌助教授などがおられた。秋の夜などはシーンと静まって，燈火にしたしむ姿が印象的であった。

日本においては，勉学する学生は，たしかによく勉強している。しかし，残ねんなことにそれらの学生はごく少数で，いわゆるマス化された大多数の学生は飼うもののない羊のように放ったらかしである。それ故に，少数の勉強する学生と，多数の不勉強な学生との断層はますます大きくなってきている。大学には戦前から，「来るものは拒まず，去るは追わず」というお高くとまっている気風があった。真理の殿堂であり，真理探求の場であるという厳めしさはあっても，そこに来る学生たち一人一人に真理を学ぶよろこびをわかち与えることとおもいやりと訓練にこと欠いていた。

この点，私はイェール大学に学んで随分教えられた。日本の大学と米国の大学で最もちがう点をあげるとするなら，私は躊躇なく，図書館と寮であるというだろう。図書館は，単に書物を死蔵しておくところでなく，そこに入ってゆくなら本をよまなければ秋の1日がすぎるのが惜しいような感じを与えさせる場所である。デパートの特売場にゆくと，ふらっと行ったものでも，なにかそこで買わないと勿体ない様な感じにかりたてられる。それと同じように，私はイェール大学の図書館にはじめていったとき，そこで読書せずにはおられないような痛烈なチャレンヂを受けた。そこにはいくつかの広い読書室があり，学生たちが静かに読書に耽っている。ほとんど雑談をするものもないし，うろうろしているものもない。すぐれた書物にとり

かこまれて他人が勉強しているということが自分の勉強に励ましとなる。

日本の学生は，本を図書館でよむことになれていない。その本を自分のものとして，自分の部屋にもって帰ってよまなくては能率が上らないというくせがある。だから図書館の本をかりてもなかなか返さないし，他人の本でも私物化してしまう。私は日本に帰って来てから，人に本を随分貸したが，その多くは返ってこない。1冊ぐらいの本のことをとやかくいうのは却って煩わしいと思ったりしているうちに，忘れてしまってそのままになってしまうことが多い。

図書が公共のものとなり広く利用され，図書館がみんなの学びの場として親しまれるためには，よい設備も必要であるが，お互い同志の規律が必要である。

私はのちに図書館の整理係として約3年間アルバイトで働いたので，図書館の側に立ってその運営の苦心をつぶさにみることが出来た。人間はルーズに流れがちで，きめられた日に書物を返却しなかったりすることがある。そうすると，1日に2セントの罰金がかかってくる。学生たちはそれを自分の責任として支払う。さらにそのクラスの担当教授が指定したリザーブの書物は原則としては，図書館の閲覧室でよむことになっているが，夕方6時に1人2冊貸し出しが出来る。しかし，翌朝9時には必ず返却しなければならない。それに1分でもおくれると10セントの罰金がつく，これは日本では考えられない位厳格におこなわれている。そうすることによって，1人の人によって，貴重な文献が独占されず，みんながその書物をよむようになる。日本では本をよむためには，その本を自分のものとしなければならないという観念があるため，その本が私物となるまでよまないし，又その本の回転率も悪い。学期末などになると，リザーブの書物に予約をするカードがつく。つまり，自分は水曜の1時から3時までにこの書物をよみたいと申しこむと，図書館の方ではその本をとって用意しておいてくれる。3時がくると予約していた他の学生が来てその本をよむという具合に，時間をくぎって書物の貸出しリストが出来ている。すると，自分に与えられた2時間にこの書物を集中してよもうという意欲が出てくる。自分のものとなっている時間に，出来るだけこの書物から学ぼうと寸刻を惜しんでよみふける気持になる。図書館は午前8時30分に開き，夜10時までやっている。試験が近くなってくると，日曜も午後2時から開き，夜も11時まで延長して開かれる。いずれも学生たちの要望にこたえて図書館側がしたことであった。

こうして私は4年間，同じ大学の同じ図書館で学んだ。先年もその場所をたずねて感慨が一入深いものがあった。人間の能力には限りがある。しかし，それぞれに与えられたちからを充分に発揮するように助成するのが教育の働きである。そして，人間の能力は，みがかれ，鍛えられてゆくときに，成長してゆく可能を宿しているのである。図書館の周囲にはニューイングランド独特のつたが赤く紅葉して西日を浴びていた。

文献探索　――二次文献の利用――　(2)

経済学分野の記事索引誌

本誌№1に，雑誌論文を探すツールとして，雑誌記事索引の主なものが，紹介されております。ここでは，その続編として社会科学，特に経済学に関する雑誌論文・記事を索引にした本館にある主な記事索引誌の特徴・内容を，利用の手引として紹介しましょう。

Ⅰ　単独雑誌の総目次・索引

個々の雑誌の各巻（通常1年分）に対する記事索引（例：エコノミスト 巻末に索引 3ケ月毎）や，それを累積した同一誌数巻（通常5年分，10年分）に対する記事索引（例：朝日ジャーナル総索引 1―251号・1959―63）等の単独雑誌の総目次・索引がある。このような総目次・索引を集めて一覧にしたものが，「**雑誌総目次索引集覧**」（天野敬太郎編　日本古書通信社，1966．137p．㊫ 027.5; A）これを利用すれば，1964年末までに出された約1,400誌の総目次や索引の所在を確かめることが出来る。

Ⅱ　社会科学特に経済学の索引

1．**雑誌記事索引―人文・社会編―**（国立国会図書館編）1948―　月刊　㊫P027; Z

a）採録範囲・内容

国会図書館に納本された和文誌の人文・社会科学関係の索引誌。主題を限定した専門別索引誌（例えば経済学文献季報）では，対象誌を専門分野に限定しているため，一般雑誌にのる学術的色彩の強い論文や，全体のページ数の関係で省かれているような随筆・ルポ記事・書評等割合いこまかく拾っている。2頁以下のものは原則として除外。対象誌は約1,400誌であるが，経済学関係だけにしぼると経済学文献季報とあまり変らない。発表された論文が記事として掲載されるのは2～3ケ月後になる。

b）索引の構成

例言・目次(分類表)・収録誌名一覧・記事の順で構成されている。分類は，政治・行政，法律，経済，産業，社会，労働，教育・文化，哲学・宗教，歴史・地理，文学・語学，芸術・芸能・スポーツ，その他，の12に分けている。各号の別に件名参照索引が年1回別刷にしてその年の第1号に付してある。又，著者から索引出来る年間著者名索引が，1965年から約1年後に別冊として発行されている。記事の記載は，著者名・論題名・誌名・巻号・頁の順で，発行年月は収録誌名一覧に巻号と併記されている。

日本で刊行されている人文・社会科学関係の学術的雑誌論文を索引出来る代表的な索引誌。なお，姉妹編として，**科学技術編**（1950―㊫P027; Z2）がある。

2．**経済学文献季報**（経済資料協議会編）№1（1956）―　年3回　㊫P028; K

a）採録範囲・内容

経済学（統計・経営・会計を含む広い意味の経済学）とこれに関連する分野（社会・政治・法律）の内外雑誌論文（日本・欧米・ソ連）と邦文の単行書を採録した索引誌。一般誌・業界誌・調査月報等の主要論文以外，即ち書評・実務的記事・無署名記事等は採録されていない。経済資料協議会(本学からは人文科学研究所が参加)に参加する研究所・図書館等に受け入れている，邦文誌556誌，欧文誌314誌，ソ連誌26誌，邦文単行書約800冊を対象としている。掲載されるのは4～7ケ月後になる。

b）索引の構成

凡例・採録誌名一覧表・分類表・日本・欧米・ソ連の各文献・著者名索引の順で構成されている。分類は16項目で，各記事には一連番号を付し，著者名索引（ＡＢＣ順）と接続させている。記事の記載は，著者名・論題名・誌名・巻号・頁・発行年

月の順。

この索引誌は，社会科学特に経済学の学術論文を主としたもので，特に経済学関係の文献目録として最もすぐれているものと広く評価されている。

3. 産業経済雑誌主要記事索引（日本開発銀行中央資料室編）年刊　昭和39年版（1964）—　㊫028.3; S

a）採録範囲・内容

通常半月刊として出されているものから，永続的に価値のある論文・記事を1年分に採録，累積した索引誌。主として，金融機関その他の会社の調査活動のために学術論文の他に業界誌，団体・協会誌の記事を多く採録しているのが特色。産業・経済に関するものを中心にして，法律・政治・労働・社会等の社会科学に関するものと欧米の雑誌の論文・記事も含まれている。対象誌数は，邦文約750誌，欧米文約120誌。

b）索引の構成

凡例・収録雑誌一覧・記事目次（分類表）・地別記事目次・著者名索引の順で構成されている。分類は論題の類似のものを各グループにまとめ，日本語・外国語論文の順に分類，配列している。この索引誌の他に見られない特徴は，論文記事の題名に内外の地域・国名等が明示されているものを別にまとめ「地域別記事」として重出していることである。従って，特定地域に関する研究・調査の場合非常に便利な索引である。各記事は，著者名・論題名・誌名・巻号・頁・発行年月の順で記載されている。

4. International Bibliography of Economics. (Prepared by the International Committee for Social Sciences Documentation) vol.1:1952-　Annual.　㊫028.33; I

単行書・雑誌論文を含めて Vol. 8:1964の場合7187点採録している。これを利用すれば外国の文献資料が探せる。欧米の他に，社会主義国の雑誌も一応カバーしていて国際的に収録範囲が広い。採録雑誌一覧表・分類表（15に分けさらに細分）・著者名索引・主題別索引を付けている。何れも英語と仏語を併記し，日本文献はローマ字で記載され，日本からはユネスコ国内委員会が年間200～400点資料を提供している。同じシリーズで **Intenational Bibliography of Political Science** (vol. 1: 1952-　㊫028. 31; I) も図書館にある。

5. その他の索引

i）**法政・経済・社会論文総覧**（天野敬太郎編）刀江書院　昭和2－3　2冊　㊥016.3; A

法律・政治・経済・社会に関する専門雑誌論文の索引。正編は約100誌の創刊号から大正15年6月まで，追編は新たに数10誌を追加した創刊号からの論文と大正15年7月から昭和2年末までの追加分を採録。この分野の雑誌が大部分創刊号から採録されているので，今でも価値を持続している。

ii）**経済・法律文献目録**（神戸高等商業学校商業研究所編）宝文館　昭和2－6　2冊　㊥016.3; K

経済・産業・社会・政治・外交・法律等に関する著書・パンフレット・統計書類，及び重要雑誌・新聞の論文の分類目録。第1集は大正5年から14年まで，第2集は大正15年から昭和5年までのものをカバーしている。

iii）**戦後社会科学文献解題　社会科学文献解説**（大阪市立大学経済研究所編）1947—1953　10冊　㊥016.3;0-2

戦後約7年間の社会科学関係の書誌としてほとんど唯一のもの。経済を中心として，各号とも前半で文献解題，後半で文献目録（単行書と雑誌論文）を収めている。収録期間は1945.9—52.6. 約3年中絶し，「経済学文献解題」55：1—12（大阪市大経研，1957㊥016.34;0-2）として空白をうめ，「経済学文献季報」に接続。現在は文献目録だけが次の iv）に連載している。

iv）**経済学文献月報**(大阪市大経研編)経済評論(日本評論社)巻末収載 vol. 4, no. 7 (1955)—　月刊　㊫P330.1;K19

v）**文献目録**　国民経済雑誌（神戸大学経済経営学会編）巻末収載　vol. 1（明治29)—　月刊　㊫ P.330.1; K22

創刊号から，海外新刊書目…最近の文献，文献目録とタイトル・内容も若干変えながら継続している。

以上のように，経済学分野を中心に記事索引誌を紹介しましたが，何れもかなりの利用価値を持っている反面，網羅性や速報性を欠いたり，刊行形態も異なりますので，どれが優れているか断定することは出来ません。従って，ある主題を研究・調査する場合，索引誌の特徴・性格を参考にしながら，他の二次文献をも利用することをお奨めします。

なお，経済学分野以外の記事索引や，その他の目録・書誌等についても逐次紹介する予定です。

学内総合目録の刊行

総合目録というのは，二つ以上の図書館又は資料所蔵機関の蔵書を一つの目録組織の下に記録したもので，文献の所在を知るために必要な資料であると同時に，これら文献の相互利用と機関相互の協力体制を確立していく上に重要なものです。ただこのような機関相互の協力体制を前提とした総合目録が，真にその機能を発揮するためには，個々の機関における資料の収集，整理，保存，利用等の面をよく整備しておく必要があります。

現在計画し，編集中の学内総合目録というのは，本学図書館および各学部研究室の諸機関に所蔵している全学の図書資料の総合目録の冊子化で，現在下記のような要領で編集中です。これらが大学における研究と教育を推進する一助になれば幸いです。なお，図書館事務室には，図書館に受け入れられ，整理された全学の図書資料のカードによる総合目録が備え付けられています。昭和39年3月末までに受け入れ，整理されたものと，昭和39年4月以降のものに分かれ，それぞれ著者，書名，分類，件名（図書館のものだけ）の各種目録があり，たえず，アップ・ツー・デートに維持されていますし，全学の図書資料の最新の情報が分るようになっています。

1. **学内総合目録**（雑誌・新聞を除く）昭和39—41年度

これは昭和39年4月に新分類に切り替えて以後42年3月末までの3年間に本学図書館に受入，整理された雑誌，新聞を除く全学の図書資料の総合目録の冊子化です。昭和43年4月刊行予定で目下準備を進めています。これは今後も一定期間毎に編集刊行していく計画です。

2. **学内雑誌・新聞総合目録**

これは昭和42年3月末現在，本学において所蔵している雑誌・新聞の所在を知るための総合目録の冊子化です。昭和42年度に引続き43年度中に刊行の予定で目下調査中です。

新町読書室だより

新町読書室は，開設以来ここに9カ月，不充分な仮施設で，隣接教室，部屋から聞こえる雑音にもかかわらず，利用学生は静粛に図書の閲読・自学自習の場として大いに活用して居ります。

新町校地に学ぶ学生は，果してどの程度当室を利用しているのか？　その概略を報告するのに，去る11月16日実施の簡単な利用アンケートを基にして見たいと思います。

★　配布学生数 650人　回答者 333人(入館学生152人　館外学生181人)

1. 当室を利用しているもの　82%　　していない　18%
2. 利用内容として備付図書の閲読が　65%　　座席利用のみ　35%
3. 当室に対する希望
   - a). 図書貸出制度　15%　　b). 図書資料の増加　14%
   - c). 開館時間延長　9%
   - d). 施設拡張・備品（机取替・ロッカー増設）14%

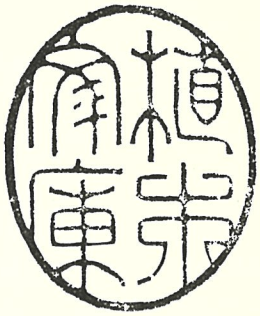
○入館者のみを対象にして，前項（希望）を見ると，a)，b)が夫々19%，c)17%。又，当室に不満があるか？に対して，座席数が不足28%，施設が悪い26%，落ちつかない17%，隣室等騒々しい14%，と言ったところである。

ここに示す項目は，一部であり，又詳細な分析についてはさて置き，実際に利用する学生の希望を，不満を，（解答・弁解以前に）我々図書館員のものとして，今後考えて行かねばならないことを附言して，“新町読書室”だよりとする。

特殊文庫（その２）

植木文庫

前回紹介した小室・沢辺文庫につづいて1893年（明治26年）４月27日，当館に設置されたのが，ここに紹介する植木文庫である。この文庫は明治啓蒙期の政治思想家として，あまりにも著名な植木枝盛（えもり）の旧蔵書である。植木枝盛についてはここに解説の要もないと思われるが，初学者のために一応略記すると，高知市中須賀に1854年（安政４年），山内藩士植木直枝の嗣子として生れ，長じてのち，自由民権運動の有力な理論家として活躍，その著作も「自由論綱」(1883年刊)，「報国纂録」(同年刊)，「民権自由論」（1879年刊）をはじめ，新聞，雑誌に多くの論説を発表するなど，当時の言論人として指導的な役割を演じ，また，かたわら「新体詩歌 自由詞林」（1887年刊）の著作もある。一方，実践面でも大いに活動し，愛国社から国会期成同盟へ，さらに自由党の結党へと，彼，植木枝盛の歩んだ道は自由民権運動とともにあったといっても過言ではないであろう。そして，遂に1891年（明治24年）第１回帝国議会が開会されてからは衆議員議員として政界においてさらにめざましい活躍が期待されたのであったが，第２回帝国議会解散直後，すなわち1892年（明治25年）１月１日，世は新らしい年を，新らしい日本の興隆とともに祝福しているとき，東京の寓居で発病し，同23日，東京病院のベットの上で35才を一期としてこの世を去ったのである。



歿後１年をへて，ようやく植木家その後の方向がかたまり，“故植木氏遺児養育義損金”募金の見通しもたって，高知出身の旧友，後輩，および言論界，政界の同志・旧知の盡力によって，同じく自由民権運動に活躍した小室信介，沢辺正修を記念する文庫がある当館に，その旧蔵書が寄贈されたのである。それは高知の植木氏宅から海路神戸を経て，ついで京都の同志社まで，はるばる運ばれ，同志社では旧図書館（現有終館）の２館，閲覧室に小室・沢辺文庫とともに特殊文庫として設置され，教職員・学生の閲覧に供せられたのである。なお，高知からの運搬費３円65銭や，さらに翌年に“書籍保管文庫修繕費”として同志社に寄付された金７円は，上述“遺児養育義損金”のうちから支出されたのであった。しかしながら，この文庫が，なぜ，同志社に寄贈されたかについては不明で，上述した経緯以外には決定的な理由はなにもないようである。しかし，社会の同志社に対する関心と支持といった漠然とした理由が結局は決定的な理由といえるのではあるまいか，これはまた小室・沢辺文庫の寄贈の場合についても同じではないかと思われてならない。

この文庫の図書は明治の初期に，わが国で刊行された，政治，法律関係図書がその大部分であって，旧蔵手択本といえるもので前回に述べた類別からすれば第１類に属するものである。もちろん，植木枝盛自身の著書もあるにはあるが，全著作が揃っているわけではない。蔵書の１・２を紹介するならば，ペリム原著「法理論」（1883年刊），ヒッセリング口述「泰西国法論」(1867年刊）やルボック著「開化起源史」(1886年刊）などの翻訳書，江木衷著「法律解釈学」(1885年刊)，小野梓著「国憲汎論」(1883年刊)，渡辺修次郎著「明治時勢史」（1883年刊）などがあり，手沢本というにふさわしい“書き入れ本”も相当ある。なお，そののち，この文庫は一時，同志社政法学校図書室に移管されたこともあり，当初は806冊と記録されているが，いつのころからか一般図書のなかに混排され，現在では確実な冊数は詳らかでないが，カード式の目録が当館に保管され，これをもとにした「植木枝盛蔵書目録」が「同志社法学　第21号　昭和９年１月」に掲載されていて，それらによると凡そ500冊ばかりである。

植木文庫設置明治27年9月説

家永三郎著「植木枝盛研究」という800頁に近い名著がある。これは同氏の永年にわたる枝盛研究の集大成ともいうべきもので，昭和35年8月に岩波書店から刊行されたものである。そのなかで家永氏は「その頃，高知の同志たちの手で，枝盛の蔵書が同志社に送られた。」とされ，また同書付載の「植木枝盛年譜」には明治27年の欄に「同月〔9月〕枝盛の蔵書を同志社に送った。」と明記されているのである。これは本号別掲の「特殊文庫紹介(2)植木文庫」の記事で，その設置を明治26年4月としているのと，1年以上もくい違うのである。この点について，あるいは“重箱の隅を”という謗りをうけるかも知れないが，当館としては明確にしておきたいと思うので，あえて余白をかりることとした。

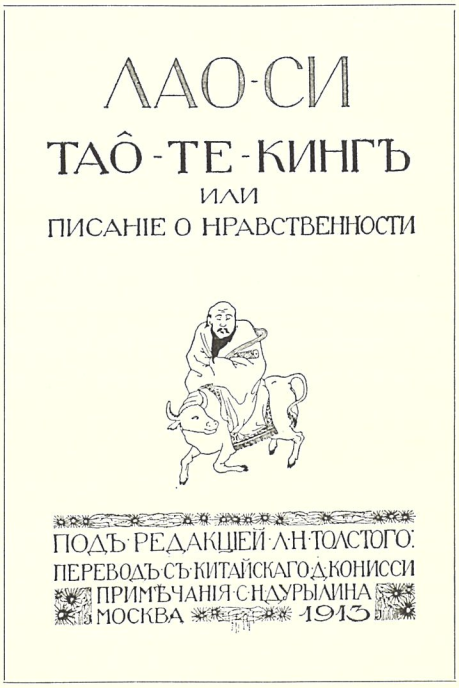
家永氏の明治27年9月説は恐らく，上記著書に引用されている「土陽新聞」明治27年9月21日号の「故植木氏遺児養育義損金トシテ（中略）右氏義損金募集高　一、金九拾九円八十八銭　内訳　一、金壱円八十八銭　神戸ヨリ京都同志社迄書籍逓送料（中略）一、金九十九銭　高知ヨリ神戸迄書籍運賃（中略）一、金七円　京都同志社書籍保管文庫修繕送金七円送金(中略)差引　一、金八拾九円五拾九銭五厘也　右金額是迄土陽新聞社ニ於テ取扱候処，今般高知第八十国立銀行ヘ預ケ有之候由」の記事から判断されたものと思われるが，この記事は募金の報告と見るべきで，この日以前の収支ということを意味するだけのものでありこれを直ちに送った日とすることは早計といわざるを得ない。

一方，同志社の資料を見れば「同志社明治26年度報告」に「昨年中〔明治26年〕故植木枝盛氏の友人諸氏より同氏記念のため其文庫を寄托せられたるを以て（中略）同志社図書内に整列して永く植木氏の記念に供せり其冊数凡べて八百六冊なりとす」とあり，また，前記「土陽新聞」の記事の「京都同志社書籍保管文庫修繕送金七円」については，少しあとで送られたらしく「社務に関する書類」のなかに明治27年2月22日付山田平左衛門宛の礼状の案文と思われる文書が綴り込まれているのである。以上の資料から従来から同志社で伝えられて来た通り明治26年説が正しいと考えるものである。なお，山田平左衛門は高知の自由党員であり，その歿後は，かって枝盛とともに県会議員でもあった西山志澄などとともに，あと始末に尽力した人の一人である。

ピックアップ

日本人として初めてトルストイと親しく交った人に小西増太郎（同志社校友）がいます。当時，彼はキエフ神学校に学び，トルストイの厚い信頼を受け，トルストイ邸では老子，孔子，孟子の講義をし，トルストイの東洋理解を大いに深めたものと思われます。ここに紹介する図書は，モスクワ滞在中の小西が，モスクワのロシヤ帝国図書館所蔵の4種の支那原本から老子を露訳して1894年に「Lao-si. Tao-te-king, ili Pisanie o nravstvennosti」と題して「哲学と心理学の諸問題」誌に発表したものを，発表後トルストイの積極的な訳文訂正の協力をえて1913年になって，同書名の下に「Pod redaktsieĭ L. N. Tolstogo : Perevod s kitaĭskogo D. Konissi Primechaniîa S. N. Dorylina Moskva 1931」と附記してモスクワで出版されたものです。

最近の朝日新聞（昭和42年12月8日号）に早稲田大学の木村毅氏が「読書日記」でこの図書にふれておられ，それによると，この序文はトルストイの「老子論」として有名なもので，原本のトルストイ全集のどの版にも省略されており，日本でも誰れも見たことがなく，氏も50年来それを探しておられた様子です。またこの図書はトルストイ博物館にも1冊しかない天下の稀書だとも述べておられます。まさにトルストイ研究に欠く



ことの出来ない貴重な資料と考えられます。

なお，故国に帰った小西増太郎は，社会評論家，哲学者となり，京都や東京の大学で教鞭をとりました。その間わが同志社大学図書館にも主任として大正初期に在任し，図書館の近代化のために重要な働きをしています。また，野球評論家小西得郎氏の尊父にあたる人でもあります。

カウンターから

カウンターに立って，毎日利用者と接していますと，およそカード目録を繰ることほど面倒くさいことはない，といった様子を示す人が，少なくありません。その点自由閲覧室で採用している開架（利用者に書架を公開する）方式は，有隣館の閉架式（出納式）とくらべて，利用者が直接資料を手にとり，目を通すことが出来るだけに，より利用しやすいという印象を与えているようです。

しかし，求める資料が，著者や書名の明らかな特定のものであるならば，目録検索によるのが，何よりも迅速，的確といえます。これは，開架，閉架の別なくいえることで，開架方式では，求める資料を書架に見出せないと，最初からその資料を図書館が所蔵していないのか，或は貸出になっていて見当らないのか，目録によらないとはっきりしないのです。これは，ほんの一例にすぎませんが，目録は，資料の求め方 ――特定の資料が必要なのか，或は主題に関する図書が必要なのか―― によって使いわけると非常に便利なものです。

もっとも，カード目録は7.5㎝×12㎝の大きさに限定されていますから，一つ一つの資料が持つ情報を詳細に細大洩らさず記録することは不可能です。では，利用者はどうすればよいのかといいますと，係員にお尋ね下さいということになります。つまり，利用者と資料を結びつける道具として目録が備えてある。しかし，それだけでは充分ではなく間隙がある。そこを係員によって補い，うめてゆこうというのが，レファレンス・サービスですが，図書館のよろず相談所ぐらいの気持で，図書館の利用の仕方，目録の検索方法なども気軽に尋ねて下さい。来館を待っています。

あとがき

“びぶりおてか”第2号をここにお届けいたします。新館建設の基本方針の決定，冊子，雑誌の総合目録編纂に着手，レファレンス・サービスの実施，新町読書室の開設等，昭和42年は，とにかく，図書館にとっては，近年にないほど，めまぐるしい激動の時期であったと思います。

本号では，図書館のこのような活発な動きを誌面の中に，折り込むべく配慮いたしました。

創刊号に掲載いたしました「図書館の歴史」は，都合により，今回は休ませていただきます。ひきつづき次回に掲載の予定でありますのでご了承願います。

“びぶりおてか”同志社大学図書館報　No. 2.　1968年2月1日　発行
発　行　同志社大学図書館　京都市上京区今出川通烏丸東入　電 話 21―2 3 1 1
編集責任者　前 川 嘉 門